



古代・中世史学界の片隅で起こっている注目すべき出来事について：大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会―「ムラの戸籍簿」の可能性』（思文閣出版、二〇一八年）に触れて（時評・書評・展示評）

田村，憲美

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 11:200-207

(Issue Date)

2019-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011938>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011938>



古代・中世史学界の片隅で起こっている注目すべき出来事について

—— 大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会——「ムラの戸籍簿」の可能性』(思文閣出版、二〇一八年)に触れて——

田村 憲美

この書籍は、本書の母体となった「ムラの戸籍簿」研究会の一〇年間におよび活動の中間報告だという。この研究会は大山喬平氏の呼びかけで当時大山氏が出講されていた立命館大学や大谷大学の学生たちがつどって二〇〇九年から続けられているもので、研究活動の主軸として「郷・村表」など「ムラの戸籍簿」データベースの作成がある。私がこの研究活動について初めて知ったのは、二〇一〇年のことで、この年の



大山喬平・三枝暁子編
『古代・中世の地域社会——「ムラの戸籍簿」の可能性——』

思文閣出版
2018年9月発行
A5判上製 544頁
税別 9,000円

秋、日本史研究会大会の翌日、立命館衣笠キャンパスで開かれた第一回「ムラの戸籍簿」研究会シンポジウムを訪ねた。テーマは「戸籍簿作成へのいざない」である。当時、立命館で研究会の世話役をしていた三枝暁子氏から案内を頂戴してして興味をひかれたのだつたと記憶している。そのシンポジウムで既刊の古代・中世史料を国ごとに検索して郷名・村名の初出を網羅するというデータベース作成の企図とその経過報告を伺ったわけだが、伺いながら想起していたのは、前世紀の後葉に角川書店が企画し、私もアルバイト・スタッフとして編集作業に参加していた日本地名辞典のことであった。この紙面をかりて少し思い出から語らせていただきたい。

II

『角川日本地名大辞典』は、利用されている方々には申すまでもないけれども、都道府県別全四七巻（四九冊）別巻二巻からなる。一九七九年の東京都が第一回配本、続いて年四巻のペースで刊行され一九九〇年の奈良県・長野県と別巻で完成した。私は早稲田大学大学院博士後期課程を八二年に退学し、学術振興会奨励研究員に一年足らず就いたあと、研究者志望のまま、さらに一〇数年の間、東京やその近辺で暮らした。そんなことができたのは、『角川日本地名大辞典』の編集部で仕事をしていたからだ。

一冊平均一〇〇〇頁を超す県別地名辞典を年四冊刊行する編集部は、まさに辞書工場だった。そこには角川本社から出向の正社員編集者、期限付き契約の嘱託編集者のほか、二か月毎に契約を更新するアルバイト職員として原稿を校閲する数十名の日本史専攻の大学院学生・オーバードクター達がいる。編集部は当初、飯田橋の事務所ビルに置かれ、その一フロアがやがて三フロアに拡大し、ついには東京大学竜岡門に近い湯島の貸ビル全体を占めた。校閲担当の大学院学生はほ

とんど都内私立大学の出身者だった。早稲田のほかに明治・法政・学習院・専修・立教などの近世史・中世史を専攻する方々がいた。編集部には小規模だが充実した資料室もあって、私たちは各県の執筆者から届いた原稿を執筆要綱と史料に照らして修正・訂正・加筆した。届かない場合は新規に作成し、毎日、専用原稿用紙にかなりの量の記事を書いた。各巻に担当編集者がつき、バイト職員が半年ごとに二つの編集作業ラインに編成されてそれらを並行して動かすような形だったと思う。

これも角川地名辞典を使われた方々には周知のことだろうが、この辞典はライバルの平凡社版『日本歴史地名大系』とは同じく都道府県別の巻立てでも、項目の立て方が著しく異なっている。つまり、角川地名辞典は各巻総説・地名編・地誌編・資料編の四部構成で、主軸である地名編では地名が五十音順で立項されているので、読者は直接に知りたい地名を検索できる。（平凡社地名辞典の方は目当ての地名を見つけないくいが、国郡ごとに立項されていて、全体が小さな地域史となった「読む辞典」といえる。）項目立てと記事執筆の準備のために、古文書・古記録など刊行史料を用いて地名カード（複写式二枚綴り）が作られ、各執筆者に送付された。こ

のカード採りは一枚単位の出来高制で、私も試みたが、扱う史料の性格・種類によつては、その報酬は費やした時間に到底見合うものではなかった。しかし、どのような史料にどのような地名が出現するのかについて、漠然とした感覚をもつことができるようになった。

さらに特色があるのは、立項された項目に「単独項目」と「連立項目」とがある点である。連立項目では同一の地名は時間的な系列にまとめられ、古代から二〇世紀後半の現代までがひとつの項目にまとめられる。郷・荘・村・町など地名に特定の性格規定を与える語は一種の接尾辞として扱われる。連立項目で重要なのは近世の村名である。これを要として中世以前の郷・村・荘名へ遡り、近代の市区町村制（一八八八年）以降の合併村などの大字や町名へと継承される。その状況を図表にして示す地名変遷表も県ごとに用意された。B3判程の用紙に手書きされ黒表紙で仕立てられた大部なものであった。

私が執筆と校閲の両方に関与した奈良県で例示すれば、「やしま 八島」（現奈良市内）の項目の下に「古代」八島 大和期から見える地名。↓「中世」八島郷 平安末期から見える地名。添上郡のうち↓「近世」八島村 江戸期〜明治22年

の村名。添上郡のうち。↓「近代」八島 明治22年〜昭和26年の東市村の大字名↓「近代」八島町 昭和26年〜現在の奈良市の町名、のように地名が連立する。このほかに「やしまのみささぎ 八島陵」が単独で立項される。（大和国の場合、地名史料の数量が多く、またその現われ方も多様であるから、編者の故永島福太郎先生のお許しを得て、「古代」や「中世」のなかでさらに子番号で子見出しを立てている。）この「* 期から見える地名」という規定があるために、執筆や校閲の過程では時代ごとに確実な初見史料を押さえることがうるさいほど要請されていた。「ムラの戸籍簿」データベースに一脈通じている。

数年前に『SHIROBAKO』（シロバコ）という深夜アニメ作品を視聴したが、そこで描写された連続アニメを制作するアニメ・スタジオの現場と地名辞典編集室には共通した部分もあって、一種の感慨があつた。私にあれ程の職業意識があつたかどうかは怪しいけれども、地名辞典の仕事には、当時としては割高な時給で専門性を期待される仕事をしているという「真摯さ」があり、また期限のある仕事ならではの悪い意味ではない「やつつけ感」もあつたと思う。いずれにせよ、辞典の形式上の規定と時間的な制約のなかで、自分の研

究テーマとは必ずしも関連しない地域と時代の荘園・村落関係史料を大量に読み、他大学のバイト職員と議論しながら仕事を進めたわけである。

さて「ムラの戸籍簿」データベースの場合、学部・大学院の学生が旧国単位に分担して「*村」「*郷」と史料で明示されているものうち、初出のみを採用して、国・郡所見年月日・史料原文・出典などを一覧できる「郷村表」、同時に国・郡単位で世紀ごとに郷・村の出現数を集計する「郷村名郡別世紀別初出表」が作成されるという。二〇一〇年の第一回「ムラの戸籍簿」研究会シンポジウムに参加して、「ムラの戸籍簿」研究会の企図に角川地名辞典と通底する部分があることを感じた私は、その点について指摘して地名辞典の積極的な活用をお勧めする旨の発言をしたと記憶する。

III

本書は序章に続いて計一八本の論考が「I地域社会の構造と支配秩序」「II神仏とムラをとりまく環境」の二部に分かって配された五〇〇頁を超える大冊である。「ムラの戸籍簿」研究会の活動になじみのない読者は、まず、研究会の経緯を

述べた「刊行にあたって」とデータベースの概要や利用法の事例を記述した序章を一読するのがよい。一八本の論考は三本を除いて、東は下野国から西は筑後国までのそれぞれ一国に定位して、論考の最初に「郷村名郡別世紀別初出表」などを用いて国ごとの郷・村の出現・分布の状況が解説され、ついで個別の主題にはいるというスタイルで書かれている。読者は自らの興味にしたがって、どの論考からでも取り組むことができる。ここでは紙幅と私の力量からすべての論考を紹介できないので、若干の論点に限って述べることにしたい。

本書所収の論考はさきに述べたようなスタイルをとるものが多いが、データベースの分析結果が直接に生かされている論考は少数である。その中で、山内譲氏の「伊予国の郷と村」は伊予一国の郷・村について立地条件を加味して数量的に検討し、古代の郷・里が平野部と山間部の境界に立地するのに対して、中世に初出する村は山間部に成立するものが多いなどの結論を提示している。著者は「郷や村の内実に立ち入らないでその消長を数量的に追うという手法にどの程度の意義があるのかはなほ心もとないが」と断っておられるが、データベースの積極的利用として他国でも試みる価値あるだろう。また、近江一国の中世史料から「村人」の出現する地

名を網羅的に抽出し、データベースの郷・村と対照する、谷昇氏の「近江国中世史料に見る「村人」の存在形態」も興味ある試みである。

「ムラの戸籍簿」データベースはそのデータ採録基準の「厳しさ」から網羅性を生かしてデータを検索したり操作したりして課題を発見していくような研究には向いているとはいえない。『平安遺文』『鎌倉遺文』のような全文データは勿論であるが、本データベースと同じくテーマを絞った藤木久志氏の『日本中世気象災害史年表稿』よりも利用方法はさらに限定されるだろう。第一回「ムラの戸籍簿」研究会シンポジウムでデータベースの企画を伺ったときに、私は漠然とそう考えたのだが、本書を読んで、本データベースには様々の可能性が拓かれていることを感じた。その上、本書に掲載された「全国郷（里）名初出検出数」と「全国村名初出検出数」（8・9頁）によれば全国的な視野から観望する限り、郷・村を称する地名出現の画期は一四世紀である。残存史料の件数は当然、時代が下がるほど増加すると想定される。したがって郷・村地名初出の件数は一四世紀よりも一五世紀のほうが増加しているが、その想定に反して一四世紀に急増した件数は一五世紀には一旦減少している。これら一四世紀に史

料上に出現した郷・村は必ずしも近世の村には継続しないとしても、一四世紀に地域社会の大きな変動（「封建革命」ならぬ「郷・村変革」）が生起したことが、説得的に提示されているのではあるまいか。

「ムラの戸籍簿」研究会を結成された大山喬平氏は、複雑な構成を持つ日本中世社会を〈庄―名〉系列と〈国―郡―郷―村〉系列の成立原理を異にする二系列からなるとする理解を提示された。その理解では前者は中央権門の所有の対象であるのに対して、後者とくに郷―村の系列は地域に生きる人々の「生活のユニット」となる。「郷村表」などのデータベースはこの「生活のユニット」の生成・消滅の様相を究明するという発想で設計されている。しかし、「生活のユニット」が厳密になにを指示するかは措いても、データベース作成のために具体的な史料を検討していれば、データベースから漏れ落ちていく残余がいやでも認識されてくる。本書の寄稿者はその点に自覚的であって、服部光真氏の「中世三河の寺社境内と村落」では一六〇一七世紀に「某寺村」とあらわれる村は中世から寺院境内に組込まれて潜在的に成立していた「生活のユニット」が近世初頭の検地などで顕在化したもので、三河国「郷村表」などに見える「某寺村」地名はこの

ような村落が一般的に成立していたことを示すとする。また、同時にデータベースに採用されている村名・郷名が実際に「生活のユニット」を指向しているか否かも問題化される。寄稿者はその点もしつかりと問題化している。伊藤哲平氏の「伊勢国の八王子社と村」では伊勢神宮支配の強力であつた伊勢国で一五〇一六世紀に村の結聚によつて八王子社が勧請・造営される事実を指摘し、そこに「生活のユニット」としての村を見出している。

このように、同じく郷・村を称する地名であっても、地名の指向性、あるいはまなざしの方向性の差異が存在する。すなわち官物・年貢公事・国役・段銭などの賦課対象としての外ないし上からの地名と、例えば在地寺社の祭祀負担を支持する地域としての内ないし下から地名である。そのことは、「ムラの戸籍簿」研究会のメンバーや本書寄稿者には共有されている。序章では山城国の地名史料について吉永隆記氏がこのことに触れているし（19頁）、木村茂光氏が「中世紀ノ川流域における「村」の出現と変遷」で「売券や寄進状等に表記された村と検注帳に採用された村とに性格の違いがあつた」ことすなわち史料の種類によつて村表記の意味に差異がある可能性があることを指摘している。上川通夫氏の「経塚・

造仏・写経と民衆仏教」が「経塚遺文、造像銘、写経奥書には、世俗領域の政治的枠組みの内部で作成される書面には表れにくいような、実生活に関係する村や家族または女性の存在が記されやすいのではないか」と述べるのもそれである。

IV

本書の刊行を記念し、二〇一九年八月三日に『古代・中世の地域社会―「ムラの戸籍簿」の可能性』を読む」と題して第六回「ムラの戸籍簿」シンポジウムが開催された。評者も久しぶりにこれに参加して、東京大学本郷キャンパスの法文2号館の階段大教室をよい雰囲気埋めた参会者とともに、「ムラの戸籍簿」データベースの現状報告と四名の評者による書評報告を聴講した。四名の評者の方々は本書所収の一八本の論考すべてにわたつて詳細な紹介・批評を展開したが、研究会の根幹にかかわる厳しい指摘も少なくなかつた。

討論のさいに司会によつてまとめられた論点で私の注意を惹いたのは、そもそも「郷村表」の作成方法や解釈といった「方法論」の問題、その理論的な支えとなつている「生活のユニット」としてのムラの理解に二点である。「生活のユニッ

ト」としての村(あるいはムラ)とは何かという問題について、私の理解では、この用語は厳密な分析概念を目指したのではなく、あくまでも中央権門による「所有」との対比において在地・地域の民衆的諸階層の生活、すなわち諸生業、信仰、誕生・婚姻・死亡などに係わる人的交流を広く包み込んだ共同性を指示している。この用語を用いることで、史料を読む研究者のまなざしをそちらへと大きく方向づけることが期待されているのであろう。(叱られるかもしれないけれども)「郷村表」などのデータベース作成も必ずしもそれ自体の直接的な有用性のみが志向されているように思われない。敢えて郷と村に対象を絞り、初出のみに着目することは、作業へのハードルを下げることに貢献し、結果的に日本古代・中世史を専攻する(しようとする)学生や研究者の参入を促している。

シンポジウム終了後キャンパス内で持たれた懇親会では、大山喬平氏に係わる年配の研究者の方々がスピーチを述べた。それはよくある風景だったが、これに加えて「ムラの戸籍簿」研究会に参加して、国ごとのデータベース作成を担当する方々が幾人もコメントに立った。特に感銘を受けたのは、この方々が、ポスドクから大学院学生までを含み、大山氏や

三枝氏の職場の関係もあつてか、所属は京阪神から東京まで広く及んでいること、さらに彼ら自身の研究主題は必ずしも村落や地域社会に係わるものでもなかったことだ。大山氏は研究会の報告書『ムラの戸籍簿——古代・中世史料に初出する郷・村名——』第1集(二〇一〇年)の巻頭言で、民俗学者高取正夫が黒田俊雄について指摘したことを例に引いて、研究者にとつて「自分がそこに帰っていきける一個の具体的な地域(フィールド)」を持つことの重要さを説いている。このことが日本古代中世史を専攻する(しようとする)人々の一部にでも実現しつつあることは喜ばしいことではないか。

最近、早稲田大学を退職された海老澤衷氏は、一九八七年の着任以来数多くの中世荘園や中世村落の故地を学部・大学の学生と調査し、多くの報告が刊行されたが、これに係わった人々の幾人かは自らの研究主題を在地・地域を包含する視点から考察する能力を磨いて特色ある研究者となられた。「ムラの戸籍簿」研究会のデータベース作成はこれと同様の効果を発揮しつつあるように思われる。私個人は出不精かつ根氣薄弱といわねばならないが、それでも私にとつては角川地名辞典編集室での仕事がデータベース作成や現地調査やそれに関わる研究会・セミナーなどに匹敵するものであったと思い

至ったので、我が儘を承知でこの紙面に記させていたいただいた次第である。あの当時に、様々の議論をしたバイト職員の方々と同種の方々がお名前は記さないけれども、研究を続けられている。角川地名辞典は出版社が企画した大仕事で、途中にバブル景気もあり、あの編集室のような場は二度と出現しないかもしれない。しかし今世紀にも日本古代中世史を志向する学生が地域や村落にも目を向け、自らのフィールドを獲得する仕組みが、たとえ片隅にでも脈々と存在することは本当に意義あることと思う。